

ひろば



▲間伐材を利用した「つむ木」を使った子ども木育体験イベント『つむ木で遊ぼう』。小さい「つむ木」をみんなで協力し、考えながら積み上げ、大きなオブジェを完成させました

7月28日(土)／新所沢コミュニティセンター
(撮影：市民カメラマン・佐藤清一郎)



▲エステンティイ自治会が中心となり、日本大学芸術学部の学生によるマジック披露や中富南コミュニティセンターでのコマまわし大会も行われた『エステふれあい夏祭』。子どもたちは浴衣姿でみこしを担ぎました。
7月28日(土)／中富南コミュニティセンター横遊歩道
(撮影：市民カメラマン・木村清貴)

誰かが喜んでくれる幸せ

玉寄 勝也さん (こぶし町在住)

よ」と言われることもあるそうです。それでも帰るころには「もう帰るの？次はいつ来るの？」と尋ねられます。そこまで相手の気持ちを動かすのは、玉寄さんが相手に寄り添い、触れ合うことを何より楽しんでいるから。「実は、私もおしゃべりが大好きなんです。会話を通して一緒に楽しい時間を共有できて、相手も喜んでくれるのがなによりうれしい。人間には自分が楽しくて喜ぶときに出るホルモンと、相手に喜んでもらったときに出るホルモンの2つの異なるホルモンがあるようですが、後者の方が私には合ってるみたいです」とほほ笑む玉寄さんが楽しんで取り組んでいる活動のひとつ「駅ボランティア」の体験会が9月30日(日)と10月1日(月)に行われます(本号13頁参照)。

「最初の一步を踏み出すのは勇気がいるかも知れませんが、ボランティア活動の輪の中に入れば、たくさんの喜びを得られますよ」と玉寄さんが語るように、困っている人に、そっと差し伸べた手が、大きな喜びを運んできてくれるかもしれません。



▲駅ボランティア体験会で指導する玉寄さん(左)

ところざわ

歴史まめ知識 27

所沢市域に関わる歴史的事項を50音順に紹介しています。今号は「ひ」です。



毘沙門堂 大字中富と三芳町上富の境に位置する多聞院は、毘沙門天を本尊とし、その本堂は毘沙門堂と呼ばれています。江戸時代に三富が開発されると、川越藩は、開拓農民の心のよりどころとして開

拓地の中央に「一寺一社」を建立しました。この「一寺」は三芳町の多福寺を指し、「毘沙門社」として創建された現在の多聞院は「一社」に数えられます。本尊毘沙門天は別名を多聞天、仏法を守護する四天王の一人で、お使いとして虎を使役するとされ、堂前の狛犬ならぬ「狛虎」や、ボタンが咲く5月の「寅まつり」が有名です。



▲毘沙門堂と「狛虎」

日歌輪翁(1792-1855) 江戸時代後期の三ヶ島中氷川神社の神官で、歌人の三ヶ島葎子の曾祖父にあたります。幼名を齋宮、長じて義信と称し、「氷川」にちなんで「日歌輪翁」の号を用いました。25歳のときに江戸で布教活動を開始し、自らの教えの実践のため弱者の救済に力を注いだといひます。活動は、低利での資金の貸し付けや飢饉に備えた備蓄の奨励、稲作や養蚕の改良など広範であり、宗教家であると同時に、今で言う人道活動家の顔もありました。著書に「安国宝鏡」があります。

雛人形 所沢は、雛人形や押絵羽子板など「際物」(季節商品)の産地としても知られ、現代までその伝統が続いています。その起源は明確ではありませんが、東新井町の人形店には天保10年(1839)の銘を持つ「雛稻荷」の石祠が残り、また近代には震災や戦災を被った東京から押絵羽子板職人の移住があったといひます。江戸情緒を伝え、大消費地でもある東京に近く、戦災にも遭わなかった立地が伝統産業の形成に一役買っていたようです。

問い合わせ 生涯学習推進センターふるさと研究
☎2991-0308 ☎2991-0309

誰でもエッセイ

◆テーマ「私の祖父母」
一枚の写真

先日、夫と一緒に93歳になる祖父が住む新潟の家を訪れた。あいさつを終えると、祖父はたくさんアルバムを出してきてくれた。私たち夫婦の結婚式や、懐かしい夏祭りの写真。丁寧に整理されたアルバムの中に、祖父と祖母と一緒に並んで写っている写真を見つけた。ほかの旅行写真とは様子が違い、普段着のまま家の裏庭で写したものだ。祖父が、がんを患って外出の減った祖母のために、裏庭にボタンや桔梗などを植えているらしいと母から聞いたことを思い出した。初めて目にするその写真は、祖父と祖母が過ごしてきた時間がどんなものだったのかを教えてくれる優しい色で飾られていた。

今もなお祖父の左手に光る金色の指輪。来年十三回忌を迎える祖母も、空の上で、きつと同じ指輪を付けているだろう。

